

赤い熟果生産に適した伏見とうがらし新品種の育成 —長期どりでの収量性及び品質について—

農林水産技術センター 生物資源研究センター 応用研究部 鴨志田 徹也

1 はじめに

京都府産の伏見とうがらしの赤い熟果は、ホテル等の業務需要を中心に取引されているが、既存の品種で熟果を栽培すると、樹勢の低下やしおれ果の発生により出荷量が低下する。そこで、これらの問題点を改善したF₁新品種の育成に取り組んでいる。今年度は、昨年度選抜した新品種候補系統について、長期間（夏から初冬にかけて）の熟果の収量性及び果実品質を評価し、有望な2系統を選抜したので、その経過を報告する。

2 F₁品種候補系統の選抜

昨年度選抜した新品種候補7系統を土耕無加温ハウスで栽培し、7月上旬から12月上旬まで熟果の収量性及び果実品質を調査した。その結果、3-33×12-18、3-45×12-18、3-3×12-18の正逆交配3組合せ（交配親の母本と花粉親が入れ替わる組合せ）で、伏見と比べて可販果収量及び初期収量が多かった。また、規格外収量のうち、しおれ果は正逆交配3組合せのいずれの組合せも伏見より少なかったが、尻腐れ果は3-45×12-18の正逆交配でやや多かった。

熟果の果実品質について、収量性の高い正逆交配3組合せの中で、伏見と比べて果型が短くなるものはなかったが、3-45×12-18の正逆交配で果型が長めであった。

熟果の食味及び果実のビタミンC含量について、新品種候補7系統いずれも伏見と比べて劣るものはなかった。また、赤色程度は7系統いずれも伏見と同等であった。

以上の結果から、有望系統の選抜について、主に栽培試験の結果から検討した。正逆交配組合せ間の形質の差は少ないこと、また、現地への普及に向けて多量の種子を省力的に採種できる雄性不稔系統を導入するためには、稔性回復遺伝子を持たない12-18を母本に、稔性回復遺伝子を持つ3-33または3-3を花粉親にする必要があることから、3-33×12-18、3-3×12-18の正逆交配2組合せからそれぞれ1系統、12-18×3-33、12-18×3-3の計2系統を選抜した（図1）。

3 今後の展開

令和4年度は今年度選抜した新品種候補2系統の生産性を評価するとともに、熟果の保存性及び果実の機能性成分等の調査を行い、最も有望な1系統を決定する。また、品種登録出願に必要な特性データを取得し、令和4年度末に品種登録出願を予定している。さらに、実用化に向けて現地試験用の種子の採種を行い、早ければ令和6年度から現地試験を行えるよう準備を進めている。

これらのことにより、伏見の熟果を安定的に出荷し、新たなブランドトウガラシとして活用できるように、栽培農家等の評価を進めていきたい。



12-18×3-33

12-18×3-3

伏見（参考）

図1 選抜した2系統の果実 (Bar=5cm)